

『悪魔の将軍』総合的考察のための予備的作業
-上演実現をめぐるカール・ツックマイヤーの活動-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2019-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松澤, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19998

『悪魔の将軍』総合的考察のための予備的作業
——上演実現をめぐるカール・ツックマイヤーの活動——

Das Vorbereiten einer Gesamtbetrachtung von *Des Teufels General*

——Carl Zuckmayers Beitrag zur Uraufführung——

博士後期課程 独文学専攻 2017年度入学

松 澤 智 子
MATSUZAWA Tomoko

【論文要旨】

ナチス政権下のドイツからアメリカに亡命したカール・ツックマイヤーは、アメリカ政府機関に協力したのであるが、その目的はアメリカに滞在するためだけだったのだろうか。

アメリカ人がドイツ人の移民に警戒心を抱き始めると、ツックマイヤーはその世論を払拭するために『悪魔の将軍』をアメリカで上演しようと考えたにちがいない。作品執筆の最中にアメリカ政府からの協力依頼を受けたツックマイヤーは、上演の機会を得られるかもしれないという期待があったであろうが、それは叶わなかった。

第二次世界大戦が終わると、ツックマイヤーはアメリカ国務省からの依頼でドイツ現地調査のために一時帰国ができることになった。しかし、ヒトラー時代の社会的慣習を消し去ることが重要な課題とされていたドイツ国内で、ナチスを題材にした戯曲を上演することは不可能であった。そこでツックマイヤーは友人たちと連絡を取り合い、チューリッヒで初演を迎える準備を始めた。

戯曲作家は、俳優や衣装といった舞台上の全てを考えながら執筆しているのであるから、上演に至らなければその作品の完成を見たとは言えない。上演の可能性を必死に追求する戯曲作家であるからこそ、ツックマイヤーはアメリカ政府に協力したと言えるのではなかろうか。

【キーワード】 *Des Teufels General*, *Geheimreport*, 戯曲上演, 亡命知識人, 対独占領政策

第1章 アメリカにおける作家活動

1. 戯曲『悪魔の将軍』の執筆に至るまで

1939年6月6日、カール・ツックマイヤーが乗った船がニューヨークに到着した。数週間後、バーモント州バーナードにあるドロシー・トンプソン (Dorothy Thompson, 1894-1961) の別荘に案内され、数日間をバーナードで過ごしたツックマイヤーは、仕事を得るために飛行機を乗り継ぎハリウッドに向った。代理人を介してワーナー・ブラザース・スタジオと仕事の交渉をすると、ツックマイヤーがドイツで成功した作家ということが考慮されて好条件で脚本家契約を結ぶことができた¹。しかし、企画から完成までの製作全てに関わりたいツックマイヤーにとっては、自分の希望が通らないプロデューサー中心のハリウッド方式に疑問を抱き始める²。このような心境の最中に興味深い仕事が舞い込んできた。しかし、脚本の執筆に取り掛かるやいなや製作中止を告げられたツックマイヤーは、議論の末にハリウッドを去る決意をした³。ニューヨークに戻ると、演劇学校講師の職を得た⁴。学校の報酬は良くなかったので、ツックマイヤーは雑誌記事を寄稿して副収入を得ていたが、それでも生活するためには十分ではなく極貧に陥る寸前であった⁵。

ニューヨークでの生活が苦しくなる一方で、ナチスがパリ陥落やヨーロッパ各国を侵略したことで勢いを増していった。帰国の希望が薄れたツックマイヤーは、精神的に弱まっていくのを感じ、自身が没落しないために新しいことを始めようと考え、バーナードで農場経営を始めることにし

¹ Vgl. Carl Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1969, S. 546-548, S. 562-566.

トンプソンは、ニューヨーク州生まれのジャーナリスト。『楽しいブドウ畑』(1925)の初演の評価とインタビュー記事をアメリカの新聞に掲載した。その後も交流は続き、1939年にツックマイヤー一家が亡命する際の身元保証人、移住後の保証人になった。Vgl. Carl Zuckmayer, *Aufruf zum Leben*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1976, S. 20-25.

トンプソンの友人の亡命者が多く住んでいたバーナードは、彼女の別荘があるトゥイン・ファームズの近くにある。英語を話せる亡命者がほとんどおらず、彼女は可能な限り彼らを援助した。

マルタ・シャート著、田村万里ほか訳『ヒトラーに抗した女たち: その比類なき勇氣と良心の記録』(行路社, 2008), 89頁 参照。

² Vgl. Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 566-568.

³ Vgl. Ebd., S. 572-573.

人違いと知りながらロシア兵捕虜を軍の権威のために処刑する、というアルノルト・ツヴァイク (Arnold Zweig, 1887-1968) の小説『軍曹グリシャの争奪戦』(1927)を映画化する仕事。当時、ソビエトがフィンランドに宣戦布告したことによってこの小説の映画化ができなくなった。

⁴ Vgl. Ebd., S. 576.

亡命者のための演劇学校の責任者であったエルヴィン・ピスカートル (Erwin Piscator, 1893-1966) の紹介でこの職を得た。ツックマイヤーは、演技や衣装、舞台音楽、演劇論など演劇を構成する全ての部門を包括して教える演劇ワークショップと戯曲におけるユーモアについての演習を担当した。

ピスカートルは、1920年代にフライエ・フォルクスビューネの演出家として活躍していた。Vgl. Thomas Ayck, *Carl Zuckmayer*, Hamburg: Rowohlt Taschenbuch, 1977, S. 53 u. S. 91.

⁵ Vgl. Katrin Weingran, "Des Teufels General" in *der Diskussion*, Marburg: Tectum, 2004, S. 33-35.

た⁶。慣れない農場の作業は大変ではあったが、戦争で毎日多くの人々が犠牲になっていることを考えると、生きていくために全てを自分でやらねばならない、とツックマイヤーは痛感するのであった⁷。

1941年12月7日の夕方、出版者のゴットフリート・ベルマン・フィッシャー (Gottfried Bermann Fischer, 1897-1995. 以下フィッシャー) からの電話で、日本軍が真珠湾を攻撃したことをツックマイヤーは知った。ルーズベルト大統領が日本に宣戦布告をしてアメリカも参戦するのであるが、それは同時にドイツがアメリカの敵国になることでもあった。バーナードの住民は今まで通り自分たちに親切に接してくれるのだろうか、とツックマイヤーは不安になったが、皆は攻撃を仕掛けた日本に怒りを向けていたが、ドイツ人に対しては変わらずに親切であった。新たな法により、ツックマイヤーは「敵性外国人」として警察に届けを出さねばならなくなった。ツックマイヤーが自宅を訪ねて来た警察官と保安官に、「バーナードでの生活を続けることができるのか」と質問すると、「法を守っている限り他の人と同等だ」と返答があった⁸。農場経営は継続できたが、ツックマイヤーの精神は徐々に追い詰められていく。現実の厳しさに苦しめられれば苦しめられるほど、至る所で幻覚を見るようになる⁹。苛立ちが募り、タイプライターを碎き壊したこともあった¹⁰。この頃執筆していた戯曲が、『悪魔の将軍 (*Des Teufels General*)』(1946)である。

1941年12月に、ヒトラー政権下で空軍技術局長を務めたパイロットであり友人のエルンスト・ウーデット (Ernst Udet, 1896-1941) が死亡し、国葬されたという記事を読んだことが作品を執筆するきっかけであった¹¹。しかし、家畜の世話や畑仕事、家の修理などの作業に追われて精神的にも不安定な状態を過ごしていたツックマイヤーには、まだ戯曲を書く余裕は無かった。さらに

⁶ Vgl. Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 580-586.

トンプソンを訪ねた際に知り合ったバーナード育ちの人たちの魅力に惹かれていたこと、自然の中が自分に適していると感じていたことが、この地へ移住を決めた理由であった。

移住の際はトンプソンに住居の手配を頼んだ。後に、長らく誰も住んでいない実家の修理をしていたジョゼフ・ヴァルドと知り合う。農耕機械販売を営んでいたヴァルドは、誰かに住んでもらい再び家畜を飼育してもらいたいと考えていた。そこで月50ドルの家賃を提案し、契約が成立した。1941年9月に一家は入居する。Vgl. Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 586-601.

当時のバーモント州の人口は36万人。州都モンペリアーの人口は8千人、大学がある一番大きな都市バーリントン市の人口は2万7千人であった。森と山が多く、林業、農業、酪農が盛んな州。Vgl. Alice Herdan-Zuckmayer, *Die Farm in den grünen Bergen*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1983, S.10-11.

⁷ Vgl. Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 601-609.

⁸ Vgl. Ebd., S. 611-612.

⁹ Vgl. Ebd., S. 621-622.

¹⁰ Vgl. Herdan-Zuckmayer, *Die Farm in den grünen Bergen*, a. a. O., S. 235-236.

¹¹ Vgl. Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 622.

第一次世界大戦でシャンパーニュに駐屯した時にウーデットと知り合い、ツックマイヤーがアメリカに亡命するまで連絡を取り合う仲であった。『悪魔の将軍』の主人公ハラスのモデルであるウーデットは、優秀なパイロットであったが、実際には事故死ではなく、横領と書類偽造を執拗に迫られたことで1941年11月17日に自殺したのであった。ウーデットの死がプロパガンダに利用されていた。Vgl. Weingran, "Des Teufels General" in *der Diskussion*, a. a. O., S. 24-26.

1942年3月上旬のある晩、ツックマイヤーの家を訪れたオペラ歌手のシャルロッテ・レーマン(Charlotte Lehmann, 1888-1976)からシュテファン・ツヴァイクの自殺を聞かされる¹²。生きる意義をあらためて考えたツックマイヤーは、ヒトラーを失脚させるためには、反抗と憤慨を糧に生きていかねばならない、誰も死んではいけない、ドイツが起こした間違いを分かち合いながら一緒に罪を償わねばならない、と考えた¹³。そして、ウーデットの死から1年が経った頃に執筆を始めるのであるが、それと同時に、陰鬱がツックマイヤーを襲う。いつ終わるか分からない戦争の厳しさ、ヨーロッパにいる両親や友人たちと連絡が途絶えている不安、アメリカで生きていく上での葛藤に苦しんでいるツックマイヤーは、ドイツの敗北を望むことによって辛い心境から解放されることに気が付くのであった¹⁴。

2. アメリカでの上演を求めて

ツックマイヤーが1942年12月から書き始めた『悪魔の将軍』は、1941年晩秋のベルリンを舞台にした全三幕で、主人公のハラスを中心に紋切型のナチス関係者たちと反ナチスの人間たちの思惑を描くことで、ヒトラー政権下の社会情勢を写した戯曲である。1941年9月からレニングラード攻防戦が始まっていたことと、12月に日本が真珠湾を攻撃したことを機にアメリカが本格的に参戦していたことから、この作品はアメリカ人に否定されてしまう可能性があった。アメリカでは上演できず、完成した作品は机の引き出しにしまったままになることを覚悟したうえで、ツックマイヤーは書き続けるのであった。作品を書き、作品と共に暮らすことで祖国ドイツと共に暮らしているようにツックマイヤーは感じていた¹⁵。「自分はヒトラーに対して積極的に戦っていない。ドイツで耐え忍ぶ生活をしていない」¹⁶という心理的な圧迫から自分を解放するために、ツックマイヤーはあえて問題の根源であるナチスを題材に選んだ。この作品を書くことで自分自身を慰め、悲しみや怒り、不安や苛立ちを払拭しようとしたのであるならば、極めて作家らしいカタルシスではなかろうか。

ドイツからの移民が増えるにつれ、多くのアメリカ人はナチスの手先や共産主義者がその中にあるのではないかという警戒心を抱いた¹⁷。その不安は消えることが無く、日々増大していく状況の中で非米活動委員会は、共産主義やナチズム、そしてファシズムがアメリカに浸透していると警告する活動によって世論の支持を集め、政治的影響力を強めて行くのであった¹⁸。アメリカ政府は、

¹² Vgl. Zuckmayer, *Aufruf zum Leben*, a. a. O., S. 8.

¹³ Vgl. Ebd., S. 13.

¹⁴ Vgl. Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 621-622.

¹⁵ Vgl. Ebd., S. 623-624.

¹⁶ Vgl. Volker Wehdeking, *Mythologisches Ungewitter. Carl Zuckmayers problematisches Exildrama "Des Taufels General"*, in: (Hrsg.) Manfred Durzak, *Die deutsche Exilliteratur 1933-1945*, Stuttgart: Philipp Reclam, 1973, S. 514.

¹⁷ 上杉忍『二次大戦下の「アメリカ民主主義」』(講談社, 2000), 27頁 参照。

参戦を正当化するために国民の警戒心や不安を利用して世論形成を始める。そして犠牲を伴う戦争になるかもしれないという意識を国民に持たせ、さらに国民から自発的な協力を引き出すための宣伝活動に力を入れるようになった¹⁹。この様な活動によって、アメリカ世論のドイツ人に対する憎悪と偏見は強められていったにちがいない。ツックマイヤーは、国内に広まる負の感情を払拭するためにアメリカで上演したいと考えながら作品執筆を続けたのではなかろうか。

アメリカが民主主義の擁護を掲げて参戦することによって、国内の演劇は「反ファシズム劇は国策に賛同、反戦劇は国策に反対」という意味になり、反ファシズム劇が上演されるようになる²⁰。例えば、リリアン・ヘルマン (Lillian Hellman, 1905-1984) の『ラインの監視』(1941) は、ドイツ人に嫁いだ娘が家族と一緒にワシントン郊外の実家に戻るが、反ナチ地下組織の一員であることを隠している夫は捕まった仲間を助けるために一家を残してドイツに戻る、という反ナチス運動を題材にした作品で、1941年4月から1942年2月の間に378回上演された。シドニー・キングスリー (Sidney Kingsley, 1906-1995) の『パトリオット』(1943) は、反ファシズムとは直接関連する内容ではないが、独立して間もないアメリカで民主主義を擁護するために戦争を肯定する作品で、1943年1月から6月の間に173回上演された。そして、ジェームス・ガウ (James Gow, 1907-1952) の『トゥモロー・ザ・ワールド』(1943) は、ナチスの教育を受けていたとは知らずにドイツから来た少年を養子として迎えてしまった教授一家の話で、1943年4月から1944年6月までの間に500回上演されている。大戦中のアメリカにおける反ファシズムに関連した作品は、上演回数が多かったと言えるのではなかろうか。また、アメリカに亡命していたマックス・ラインハルトがプロデュースした『息子と兵士』は、1943年5月4日から22日の間に22回上演され、レッシングの『賢者ナータン』(1779) を基にフェルディナント・ブルックナーが書いた同タイトルをピスカトールがプロデュースした作品は、1942年3月4日から4月18日の間で28回上演されている²¹。ツックマイヤーは、ラインハルトたちのようにドイツから亡命した演劇人が関わる作品が上演され

¹⁸ 非米活動委員会 (House Committee on Un-American Activities) は、米国下院議会で1938年特別委員会として設立された。共産主義やリベラル左派を「非アメリカ的、政府転覆的」とみなす議会内保守派の指導下に作られたこの委員会は、全国を「反共ヒステリー」状態に陥れた。“非米活動委員会”，日本大百科全書，JapanKnowledge，URL: <http://japanknowledge.com> (参照日 2018年9月18日)

¹⁹ 上杉 (講談社，2000)，34-35頁 参照。

アメリカが本格的に大戦に参戦する頃には、1929年の大恐慌から立ち直り、社会全体が活気を取り戻しつつあった。戦時下の気晴らしのために演劇を見たい人も多かったので、劇場や映画館などの娯楽施設での宣伝活動は効果があった。鈴木周二『英米文学シリーズ3 現代アメリカ演劇』(評論社，1977)，109-110頁 参照。

²⁰ 鈴木 (評論社，1977)，122-131頁 参照。

²¹ 作品は Internet Broadway Database で調査した。URL: <https://www.ibdb.com/> (参照日2018年9月18日)

『息子と兵士』は、アメリカの劇作家アーウィン・ショー (Irwin Shaw, 1913-1984) の作品。

フェルディナント・ブルックナー (Ferdinand Bruckner, 1891-1958) は、オーストリアドイツの作家。ナチスの非道さを劇化した作品の多くは、60年代から上演される。ハリウッドでは1939年から反ナチス映画を製作。明石政紀『フリッツ・ラングまたは伯林=聖林』(アルファベータ，2002)，157-159頁 参照。

ていることから、自分の作品も上演される可能性があると期待したのではなかろうか。穿った見方かもしれないが、この点に着目したツックマイヤーは、上演の機会を得るために国策に協力する姿勢を示す反ファシズムの作品として『悪魔の将軍』を執筆したのではないかの憶測もできる。しかし映画界と同様に、簡単には上演できない「プロデューサー・システム」がアメリカの演劇界にも確立しているため、ツックマイヤーは、アメリカ戦略情報局 (Office of Strategic Services, 以下 OSS)²² から依頼されていた『機密報告書 (Geheimreport)』の作成を引き受けることによって、強力な後ろ盾を得て、アメリカでの上演を実現させようと考えたのかもしれない。

第2章 文学活動のための協力

1. 戦略情報局からの依頼で『機密報告書』を作成

1977年1月18日にツックマイヤーが息を引き取ると、遺稿からナチス支配下のドイツに留まっていた作家や俳優、演出家、音楽家などおよそ150人の名前とその人物たちがドイツに留まった理由が記載されている書類の束が発見された。後にこの書類が、ツックマイヤーが OSS から依頼され、1943年秋から作成を始めて1944年春に完成させた『機密報告書 (Geheimreport)』であることがわかった²³。ツックマイヤーはリストに挙げた人物を、自分の立場を駆使してドイツ文化の価値をナチス時代の間も守り続けようと、きわめて意識的に行動をする人物の「グループ1: ポジティブ」、積極的なナチス黨員や自分の信念と知識をナチスに捧げ、誰かを密告して危険にさらす動きをする悪意を持つ人物の「グループ2: ネガティブ」、ナチスに協力している面と抵抗している面の両方を持ち合わせている人物の「グループ3: 特例、部分的にポジティブ、部分的にネガティブ」、そして、ナチスに関心を示さない人物や態度が曖昧でポジティブなのかネガティブなのか判断しかねる人物の名前が挙げられている「グループ4: 無関心な人、不透明な人、判断しかねる人」という4グループに分けて、亡命する1938年夏までの自分の記憶を基に個々の人物について報告している²⁴。ツックマイヤーがこの報告書の作成を依頼された背景について詳しく述べることは本論から逸脱するので控えるが、報告書を作成することでナチス政権を倒す戦いにツックマイヤー自身も貢献できると考えていたことと、アメリカ政府に協力する意思があることを示せたことは記しておく²⁵。

OSS の調査分析部には、当時アメリカにあった各学会の重鎮、ファシズムを憎みその打倒のた

²² 現在活動している CIA (Central Intelligence Agency, 中央情報局) の前身。1942年6月13日にルーズベルト大統領の指示で設立され、1945年9月20日に解散した情報機関である。Vgl. Carl Zuckmayer, *Geheimreport*, (hrsg.) Gunther Nickel und Johanna Schrön, Göttingen: Wallstein, 2002, S. 407-477. hier S.409-413.

²³ Vgl. Zuckmayer, *Geheimreport*, a. a. O., S. 408.

原本は Das Deutsche Literaturarchiv Marbach で保管されている。

²⁴ Vgl. Ebd., S. 15-16, S. 407-408.

²⁵ Vgl. Joachim Szodrzynski, *Der Nachrichtendienst und sein Dichter – Carl Zuckmayers Geheimreport Überlegungen zu einem deutschen Intellektuellen*, in: (Hrsg.) Joch Markus und Wolf Norbert Christian, *Text und Feld Bourdieu in der literatur- wissenschaftlichen Praxis*, Tübingen: Max Niemeyer, 2005, S. 342.

めに知性を捧げようとしていた優秀な若い研究者、亡命して来た多数のユダヤ人やドイツ人、日系アメリカ人が協力者として集まっていた²⁶。『機密報告書』はこの部の任務の一環で、ツックマイヤーに報告書の作成を依頼したエミー・ラドー (Emmy Rado, 1900-1961)²⁷ はスイス出身の亡命者で、バイエルン州の大臣を務めたヴィルヘルム・ヘグナー (Wilhelm Hoegner, 1887-1980) の下 OSS で働いていた²⁸。フランクフルト学派の一員であった哲学者ヘルベルト・マルクーゼ (Herbert Marcuse, 1898-1979) は、不正、不自由、不平等を生み出す資本主義体制の社会的諸条件の分析を OSS で行っていた。ベルトルト・ブレヒトは、当時の議会図書館の館長であると同時に情報調査局にも影響力を持つアーチボルト・マクリーシュ (Archibald MacLeish, 1892-1982)²⁹ に、アメリカのために協力することを手紙で申し出ている—

私はドイツを本当によく知っています。だから、絶え間なくかつシステムティックにアメリカからラジオを通じて真実を直接ドイツに伝えるためのその瞬間が間違いなく来ていると確信しています。(中略) 私はこのような骨を折る仕事に喜んで協力したいのです。私がこういった際にお役に立てると考えていることを、あなたはご存知です。なにかそういう計画を検討しているかどうか、そしていつ、どこで検討しているのかをお尋ねしてもよろしいでしょうか³⁰。

このようにアメリカに協力した亡命者達は多く、決してツックマイヤーだけが特別であったわけではない。ドイツからアメリカに亡命した知識人や作家たちは、政府に協力して信頼を得て国内に留まれるように努めていた。協力依頼を拒めば、ドイツに強制送還されることも考えられる。アメリカに滞在できなくなることは、彼らにとって死活問題である。一方のアメリカも、ドイツに関する正確な情報を得るためにドイツから亡命してきた知識人たちの協力が必要であった。両者の利害は一致しており、ツックマイヤーも数ある協力者の一人であったと言えよう。

ツックマイヤーにも事情があった。亡命中とはいえ、その間に一作品も上演できないことは戯曲家として非常に耐えがたいことであったにちがいない。戯曲作家は、作品を書き上げることが最終目的ではなく、上演することによって作品の完成に至る。OSS が上演を条件の一つに挙げて協力

²⁶ 加藤 (平凡社新書, 2005), 64-70頁 参照。

²⁷ 夫はハンガリーから亡命して来た心理学者シャンドル・ラドー (Sandor Rado (1890-1972)). Vgl. Jang-Weon Seo, *Die Darstellung der Rückkehr*, Würzburg: Königshausen & Neumann, 2004, S. 19.

²⁸ Vgl. Seo, *Die Darstellung der Rückkehr*, a. a. O., S. 19.

ラドーの協力者であったヴェルナー・トルマン (Werner Thormann, 1894-1947) は、1933年3月パリに亡命。1938年に雑誌 *Die Zukunft* の編集長になった。1940年にフランスが降伏するとリスボン経由でアメリカに亡命して1943年から OSS で働いた。トルマンは *Geheimreport* を評価する任務も引き受けていた。Vgl. Nickel und Schrön, *Carl Zuckmayers Geheimreport*, a. a. O., S. 411-412.

²⁹ Vgl. Nickel und Schrön, *Zuckmayers Geheimreport*, a. a. O., S.413.

³⁰ Bertolto Brecht, *Werk: Große kommentierte Berliner und Frankfurter Ausgabe*, (hrsg.) Werner Hecht, Jan Knopf, Werner Mittenzwei und Klaus-Detlef Müller, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1998, S. 219.

を求めたかどうかはわからないが、ツックマイヤーはアメリカ側から差し出された絶好の機会を逃すまいと思ったかもしれない。加えて、バーナードに住んでいたツックマイヤーは、農作業だけではなく日常生活の手助けをしてくれる隣人と日々触れ合う中で、仲間を理解して敬意を表すアメリカ人たちに強い絆を感じていた³¹。1945年10月31日付でツックマイヤーがドイツで暮らす友人のアンネマリー・ザイデル (Annemarie Seidel, 1894–1959) に出した手紙には、「アメリカでの6年間は簡単に消し去ることは出来ないし、してはならない。今日、私はここに強い繋がりを感ずているし、義務もある。私たち一家はここを単なる港や待合室のように考えているのではなく、ここが故郷になるようにしたし、自分たちが一時滞在者であると思いたくない」³²と書いている。この手紙からもアメリカで得た仲間に対してだけではなく、入国を許可してくれたアメリカに対してもツックマイヤーが恩義を感じていることも読み取れる。心からアメリカに協力したい、ヒトラーに独裁支配されているドイツをアメリカに救ってもらいたいという思いもあって、ツックマイヤーはOSSに協力していたことも理解できるであろう。

1945年5月、ドイツ軍が無条件降伏をするとアメリカ政府は非ナチ化のための政策を打ち出すのであるが、ドイツ国内で完璧に整理されたナチスの書類が見つかったために、『機密報告書』も含めてOSSが作成した書類は不要となった³³。ツックマイヤーは7月に『悪魔の将軍』を書き上げたのであるが、アメリカでの上演の目処は全く付いていない状況であった。その最中、国務省から報告書作成の新たな依頼を得たツックマイヤーは、一時的ではあるが、ドイツに帰国できる機会を得た。

2. 国務省からの依頼でドイツの状況を調査

ツックマイヤーは、ドイツに駐留しているアメリカ軍から送られてくる報告を基にしてその駐留地域の文化や出版の問題点を指摘するという国務省の仕事を1945年7月初旬から始めた。ドイツから離れた場所で報告書だけを頼りに改善策を考えることは無駄であるとツックマイヤーは感じていたが、農場経営を続ける経費が必要であったためこの仕事を辞めるわけにはいかなかった³⁴。『悪魔の将軍』を上演することに加え、帰国したいという思いも抱いていたツックマイヤーは、帰国の可能性について、「いつ、どうやって帰国できるのかまだわからない。ビザも無いし、移動も

³¹ Vgl. Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 617.

³² Carl Zuckmayer; Annemarie Seidel, *Briefwechsel*, (hrsg.) Gunther Nickel, Frankfurt am Main: S. Fischer, 2008, S. 134.

ザイデルは、ツックマイヤーの戯曲『十字架の道』(1920)に出演した女優。1920年から1922年までツックマイヤーと恋愛関係にあった。ザイデルは1935年に出版社を営むペーター・ブーアカンフ (Peter Suhrkamp, 1891–1959)と結婚する。Vgl. (Ed., eingeleitet und kommentiert) Gunther Nickel, *Persönlich — wär so unendlich viel zu sagen. Der Briefwechsel zwischen Carl Zuckmayer und Annemarie Seidel*, in: *Zuckmayer-Jahrbuch*, Band 2, St. Ingbert: Röhring Universitätsverlag, 1999, S. 9–260, hier S. 15–16, S. 20.

³³ Vgl. Nickel und Schrön, *Carl Zuckmayers Geheimreport*, a. a. O., S.466.

³⁴ Vgl. Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 632–635.

できない。アメリカ軍を通じ、数か月間の芸術研究と報告のための旅行としてドイツとオーストリアに行くというわずかな望みがある」(1945年10月31日付)とザイデル宛ての手紙に綴っている³⁵。この手紙から3ヶ月後の1946年1月30日、ツックマイヤーは1943年から申請をしていたアメリカ国籍を取得していた³⁶。この時期に得たということは、ツックマイヤーをドイツに派遣して現地調査を円滑に行わせようというアメリカ政府の考えがあつてのことであろう。1946年3月25日付の手紙で、ツックマイヤーはフィッシャーの妻 (Brigitte Bermann Fischer, 1905-1991) に、帰国の可能性が見えるという嬉しい報告をしている—

アメリカ軍がドイツから国務省に送った新たな電報の内容は、「我々はツックマイヤーが劇場担当の士官としてベルリンやミュンヘンで素晴らしい報告書を作成すると確信している。同時に、以前のような劇場のある生活を再びドイツに広めることが、彼特有の能力によってもたらされるかもしれない。ミュンヘンやベルリンでの任命ではあるが、特にその地域に活動を制限することはない。(中略)4ヶ国が進駐しているエリア間で、劇場の将来性についての交流のために彼の特別な個人指導がこの計画で役立つことになるであろう」というものなんだ。良いだろう？ 他の地域にも行けるなんて！(中略)私は最終的な承諾をしたよ。今は、特別な条件や出発の日程などについての連絡を待っているところなんだ³⁷。

1946年10月、ツックマイヤーは11月から翌年3月までドイツで調査をする正式な出発指令を得た。任務の内容は、アメリカ軍が駐留しているドイツとオーストリアの各都市に赴き、軍の生活の状況を報告すると共に、軍と住民の意思疎通の方法、地域内にある全ての文化のための施設の改善と活性化、生活をより豊かにする方法を提案することなどであった。「私の特命は、それぞれ異なる地域の全ての劇場企画を結びつけることであろう」(1946年4月12日付)³⁸とフィッシャーに伝えているように、自分がドイツと世界を繋ぐ架け橋になることが重要であると考えながら、ツックマイヤーはドイツに出発した³⁹。

ベルリンは絶え間ない空爆によって壊滅状態にされ、ドイツの権力と文化が完全に無くなっていた。文化再建に必要なドイツ人の芸術家の多くは、ナチスと関係があつたために就業許可を得る手

³⁵ Zuckmayer; Seidel, *Briefwechsel*, a. a. O., S. 134.

³⁶ Vgl. Nickel und Schrön, *Carl Zuckmayers Geheimreport*, a. a. O., S.312.

³⁷ Gottfried Bermann Fischer; Brigitte Bermann Fischer, *Briefwechsel mit Autoren*, (hrsg.) Reiner Stach, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1990, S. 356-357.

³⁸ Ebd., S. 358.

³⁹ Vgl. Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 632-635.

この任務に禁止事項は無く、政治的な監視や探査とも関係が無かつたので、何も負担はなかつた。身分は一般市民であつたため軍服を着る必要はなかつたが、移動、食事、宿舎に関してはアメリカ軍兵士と同じ待遇、給与は大佐と同等であつた。

続きの際に拒否され、最も正統な就業許可を持っている芸術家は年を取り過ぎていた。そして独創的な発想があふれる次世代は、ナチスの文化政策によって大きな失望感を抱いていたために新しい環境に適応させるには時間が必要であった。しかし、再び文化を開花させることは極めて難しい状況下のベルリンで1945年9月に劇場が再開すると、文化面においても優位な立場になるための争いが各国の進駐軍の間ですでに始まっていた。「ベルリンを制する者は、ドイツを手に入れる (Wer Berlin kontrolliert, besitzt Deutschland)」という言葉は政治だけではなく、映画や劇場、出版を支配する意味も持っていた⁴⁰。そして、ベルリン以外の都市でもゆっくりではあるが劇場が再開されていった⁴¹。

ベルリンの劇場が再び賑わいを取り戻しつつあったにもかかわらず、『悪魔の将軍』はドイツ国内での上演を禁止されていた。それは、ナチスを題材にしたことと、その現実的過ぎる描写によって国民が過剰反応を起こすと危惧されたからだ⁴²。連合国は、民主化、非ナチ化、再教育という文化政策のスローガンの下でドイツ国民に文化的な生活を再生するための統制をして、生き延びた人たちに民主的な生活環境を広く定着させ、脳裏に残っているヒトラーの痕跡とヒトラー時代の社会的慣習を消し去ることを特に重要な課題としていた⁴³。また、第一次世界大戦におけるドイツの敗北には、戦線に出ない国民の裏切りによるものであるというドイツ軍への擁護論があった。そのためアメリカ政府は、『悪魔の将軍』がその擁護論を助成してアメリカ軍への抵抗や暴動を促すのではなかろうかと懸念し、ドイツを再建するための政策にこの作品が適していないと判断していたのである⁴⁴。さらにアメリカ政府は、新聞、雑誌、図書、映画などを通じてナチスのプロパガンダに洗脳されてきたドイツ人に新たな情報を提供することで、考えや習慣を全面的に転換して再び戦争を引き起こさないような価値観を育むように活動していた⁴⁵。

アメリカ軍は、ヘッセン、バーデン＝ヴュルテンベルク、バイエルンの3州とブレーメン（イギリス占領地区内飛占領地）、ベルリンのアメリカ占領地区を占領した。7月にフランクフルトにドイツ占領軍政部（Office of Military Government for Germany (U. S.) : OMGUS）が新設される

⁴⁰ Vgl. Seo, *Die Darstellung der Rückkehr*, a. a. O., S. 29–32.

⁴¹ Vgl. Weingran, “*Des Teufels General*” in *der Diskussion*, a. a. O., S. 19–20.

⁴² Vgl. Seo, *Die Darstellung der Rückkehr*, a. a. O., S. 46.

⁴³ Vgl. Ebd., S. 46.

米軍駐留地域では、再教育の理念と民主主義を普及するため「アメリカ・ハウス」と呼ばれる情報センターが設立された。読書室が開室され、講演会や映画上映など多様な文化サービスが展開されていたことを一例に挙げる。三浦太郎「占領期ドイツにおける米国の図書館対策—アメリカ・ハウスの設立を中心に—」日本図書館情報学会『日本図書館情報学会誌』47(2), 2001, 67–80頁 参照。

⁴⁴ Vgl. Weingran, “*Des Teufels General*” in *der Diskussion*, a. a. O., S. 27.

⁴⁵ Vgl. Edsel W. Stroup, *The Amerika Häuser and their Libraries: an historical Sketch and Evaluation*, in: *The Journal of Library History*, Vol. 4, No. 3, 1969, p. 241.

⁴⁶ Vgl. Carl Zuckmayer, *Deutschlandbericht für das Kriegsministerium der Vereinigten Staaten von Amerika*, (hrsg.) Gunther Nickel, Johanna Schrön und Hans Wagener, Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch, 2004, S. 59–68.

と、軍に代わってOMGUSが占領行政を担当することになり、ベルリン、プレーメン、シュトゥットガルト、フランクフルト、ミュンヘンも統括するようになった。ツックマイヤーはこれらの地区を中心に、各地域の劇場や映画関係者に面会し、カンファレンスなどに参加していた。ツックマイヤーが国務省から依頼を受けた半年間の日程と調査した街を下記に示す⁴⁶。

〈調査日程とルート〉

1946年	11月4日	ニューヨーク発
	11月7日	ワシントン、ラーゲンス経由パリ着
	11月12日	ベルリン着 *悪天候で到着が遅れた。
	11月13日 } ~12月13日 }	ベルリン、ミュンヘンを中心に、フランクフルト・アム・マイン、ウィースバーデン、ダルムシュタット、マインツ、ハイデルベルク
1947年	12月14日 }	スイスにて休暇
	~1月1日 }	
	1月2日 }	シュトゥットガルト、チューリンゲン、ウルム、ヴェルツブルグ、ヴィース
	~1月25日 }	バーデン、ベルリン、ミュンヘン
	1月26日 }	ウィーン中心に、リンツ、ザルツブルク
	~2月22日 }	
	2月23日 }	ミュンヘン、ベルリン
	~3月8日 }	
	3月9日 }	ドイツにて休暇
	~3月14日 }	
	3月15日	ミュンヘン
3月16日 }	フランクフルト・マム・マイン	
~3月25日 }		
3月28日	フランクフルト・マム・マイン発 *悪天候で出発が延期していた。	
3月30日	ニューヨーク着	

ツックマイヤーは、ドイツで『悪魔の将軍』が上演できることを期待して現地調査の依頼を引き受けたにちがいない。しかしアメリカ政府が考えているドイツ人再教育の策により、上演が無理であることをツックマイヤーは既にわかっていたようで、ドイツやスイスで暮らしている友人たちと手紙を通じて、アメリカ占領地以外で上演できるように準備していた。次の章では、1946年12月14日にチューリッヒで『悪魔の将軍』の初演を迎えることができた経緯を、友人たちとの書簡を基に追ってみる。

第3章 『悪魔の将軍』完成と上演

ツックマイヤーは『悪魔の将軍』を書き上げると、ザイデルとズーアカンブに、「まもなく新しい作品を送ることができると思うよ、既にストックホルムで印刷されているから」(1945年9月2日付)⁴⁷と手紙を送った。ズーアカンブは劇評家のヘルバート・イエーリング (Herbert Ihering, 1888-1977) にこの手紙を見せていたらしく、イエーリングは、「私はドイツ劇場のグスタフ・フ

⁴⁷ Zuckmayer, Seidel, *Briefwechsel*, a. a. O., S. 129.

オン・ヴァンゲンハイムの所にいます。もし『悪魔の将軍』をシューマン通りで上演されたら、なんと嬉しいことでしょう」(1945年11月2日付)と書いた手紙をツックマイヤーに出している⁴⁸。しかしナチス政権が終わり、ソビエトが統治する地域の舞台監督に就任したイエーリングは、『悪魔の将軍』の上演を推薦することは無かった⁴⁹。

1946年に『悪魔の将軍』がフィッシャー社から出版されると、多くの友人からツックマイヤーの元に手紙が届いた。例えば、クルト・ヒルシュフェルト(Kurt Hirschfeld, 1902-1964)からは、「皆が驚いていますよ。あなたが作品で書いた状況をどこで知って、把握していたのかってね」(1946年6月18日付)⁵⁰という内容が書かれていた。1920年代半ばに知り合ったオーストリアの作家アレキサンダー・レルネット-ホレーニア(Alexander Lernet-Holenia, 1897-1976)からは3月25日付で、次のような手紙が届いた。

『悪魔の将軍』は、生粋のドイツ人がドイツのためにドイツで書いた作品だ。ブロードウェイに乗り出してはダメだ[厳しい条件付きでならいいかな]、(中略)なにも変えてはいけない[ただし、テクニクや詳細は変えても良い]。ことは重大だ。混乱するなよ!(中略)君がこの作品を書いたことを嬉しく思っているよ。ドイツで『ケーペニックの大尉』が上演される可能性は低い。『悪魔の将軍』を持って帰国したまえ。我々皆が感じていたことを、アメリカでは誰も知らないこと、知りたくないことを君は感じていたんだ⁵¹。

およそ1ヶ月後の4月30日付の手紙でレルネット-ホレーニアは、初演をドイツで迎えるように念押しする次のような手紙を送っている。

⁴⁸ Ebd., S. 271.

シューマン通りに、ドイツ劇場が建っている。

グスタフ・フォン・ヴァンゲンハイム(Gustav von Wangenheim, 1895-1975)は、俳優で劇作家。ヴァンゲンハイムが率いる劇団「一座」(Truppe)の1931年12月23日の旗揚げ公演『鼠落とし』の制作に渡独中の演出家で俳優の千田是也(1904-1994)が参加している。萩原 健「ヴァンゲンハイム作『鼠落とし』(1931)の制作における千田是也の役割について」, 早稲田大学演劇博物館『演劇研究センター紀要: 早稲田大学21世紀COEプログラム: 演劇の総合的研究と演劇学の確立』(6), 2006, 235-240頁 参照。

⁴⁹ Zuckmayer, Seidel, *Briefwechsel*, a. a. O., S. 285.

⁵⁰ (Hrsg.) Gunther Nickel und Ulrike Weiß, *Carl Zuckmayer. 1896-1977. "Ich wollte nur Theater machen"*, Marbacher Katalog 49, Marbach am Neckar: Deutsche Schiller-Gesellschaft, 1996, S. 334.

クルト・ヒルシュフェルトは、1920年代にBerliner Börsen-CouriersのMitarbeiter, 1929年から1933年はダルムシュタットのヘッセン国立劇場でドラマトゥルクだった。1933年にスイスに亡命。1935年までチューリッヒ劇場のドラマトゥルク, 1935年に『新チューリッヒ新聞』の特派員としてモスクワに駐在していた。1938年、スイスに帰国。1946年、チューリッヒ劇場の副ディレクターに就任, 1961年にディレクター兼美術責任者になった。Vgl. Zuckmayer, Seidel, *Briefwechsel*, a. a. O., S. 270.

⁵¹ (Ed., eingeleitet und kommentiert) Gunter Nickel, *Carl Zuckmayer—Alexander Lernet-Holenia, Briefwechsel*, in: (Hrsg.) Gunter Nickel und Erwin Rotermund, *Carl Zuckmayer—Alexander Lernet-Holenia Briefwechsel*, Zuckmayer-Jahrbuch, Band 8, Wallstein: Göttingen, 2006, S. 9-185, hier S. 33.

『悪魔の将軍』を何人かに渡したよ。皆、直ぐに夢中になった。『悪魔の将軍』はドイツのための作品だとずっと考えている。(中略) 僕としては、実際にドイツで成功してからアメリカで上演するのが良いと思っているんだ、逆ではなくて⁵²。

ツックマイヤーがレルネット-ホレーニアにブロードウェイで上演したい旨を伝えている資料は見つけられなかったが、作品が仕上がってから比較的早い時点の1945年10月31日付の手紙でツックマイヤーは、「新しい作品はブロードウェイで上演すべきだろう。明後日、交渉のためにニューヨークに行く」⁵³とザイデルに伝えていることから、ツックマイヤーがブロードウェイでの上演を望んでいたことは確かである。

国務省からの依頼を得る可能性が濃くなった時点で、ツックマイヤーはアメリカで上演することよりも、ドイツで上演することを願ったと考えられる。「私自身は、9月か10月にチューリッヒで初演を迎えたい。(中略) 何度も問い合わせているのに、君達からは返事がないから繰り返すよ。(中略) どうして、『悪魔の将軍』は出版だけで止まっているのかな。(中略) 全く納得できない。情報を早急に欲しい」(1946年4月12日付)⁵⁴と、上演できない焦りが伺える催促の手紙をフィッシャーに送っている。その3ヶ月後の7月8日付のツックマイヤーから再びフィッシャーに宛てた手紙では、『悪魔の将軍』の上演を希望する劇場があったことがわかる。

ウィーンから何か聞いてないかい。つまり、計画されているブルク劇場の上演のことを言っているんだけど。(中略) ホーガン [ベルリンの前劇場オフィサー、任務を果たした今はロンドンのMGMにいる] を通じて、カールハインツ・マルティンにベルリナーヘッベル劇場 [アメリカのライセンスを得ている] で初演を委任する要請があったんだ。自分がドイツでの初演を自由に決められないことと、作品は私個人ではなくてストックホルムにあるフィッシャー社を通じてしか契約できないことを手紙に書いたよ。(中略) とにかく承諾はしなかったし、出版社抜きでは何もしないよ⁵⁵。

フィッシャーと上演に関する手紙を交わす一方で、ツックマイヤーはウィーンのヨーゼフシュタット劇場で演出をしていたハインツ・ヒルベルト (Heinz Hilpert, 1890-1967) と連絡を取り合っていた。そして1946年12月14日、ヒルベルトの演出で『悪魔の将軍』がチューリッヒ劇場で初

⁵² Ebd., S. 36.

⁵³ Zuckmayer; Seidel, *Briefwechsel*, a. a. O., S. 134.

⁵⁴ Ebd., S. 360.

⁵⁵ Bermann Fischer, *Briefwechsel mit Autoren*, a. a. O., S. 362.

エドワード・ホーガン (Edward Hogan, ????) は、アメリカ軍政府におけるドイツ劇場問題の担当者だった。Vgl. Zuckmayer, Seidel, *Briefwechsel*, a. a. O., S. 280.

演を迎えることになった⁵⁶。初演2日前の12月12日、ツックマイヤーはフィッシャーに手紙を書く—

初演2日前に到着したら、数百もの人が私を待っていた。その中に多くの友人がいる（中略）。稽古や他の劇場を観覧して、インタビュー、ラジオ番組、写真撮影などで、過去の日まぐるしく大成功した時期よりも大変だよ。（中略）『悪魔の将軍』の成功は確信できる。（中略）すばらしく、とにかく卓越したヒルベルトの見事な演出、ハラスを演じる役者の貫禄、まさに歓声が鳴り響き、大音響をたてる成功だ。（中略）作品は現在、ドイツでの上演予定はない。（中略）ズーアカンプが代理を務めてくれて、作品の販売をしてくれているよ⁵⁷。

チューリッヒでの上演が話題になり、スイスの新聞や雑誌で取り上げられるとその評判はドイツにも伝わり、1947年11月8日のハンブルクでのドイツ公演を皮切りにフランクフルト、ミュンヘン、ベルリンで上演された⁵⁸。『悪魔の将軍』の人気は高まり、ドイツ国内で1947/1948年シーズンから1949/1950年シーズンの間に計3238回上演された⁵⁹。予想以上の反響を見たズーアカンプの呼びかけで、ツックマイヤーを交えた討論会がドイツ各地で行われるのであった。

ナチスによって活動を抑えられていたドイツ演劇界は、戯曲作家不在の空白時期が生じかねなかった。その危機を救った作品が、戯曲『悪魔の将軍』であったと言えるのではないだろうか。作品と共に帰国したツックマイヤーは、第二次世界大戦後にドイツが演劇界の再建に歩みだしたとき注目を集め、文壇の大家として活躍し続けた。

ナチス政権下のドイツから逃げ、亡命先の政府機関に協力をした知識人たちは少なからず存在する。受け入れてくれた国に対して恩義を示すことは当然の行為であっただろうし、それは戦時下の特色でもあったと言えるだろう。平常時とは異なり、モラルの次元を超えた行動をしなければ生きていくことは出来ない過酷な状況であったことは確かであろう。よって亡命者たちの行為に対して、よし悪しを下すべきではない。アメリカ側も正確な情報と信頼できる人物を求め、知識人たちに接触を図っており、ツックマイヤーもアメリカ政府に協力した亡命者の一人であった。『機密報告書』を作成することでアメリカ政府に協力したツックマイヤーだけが特別であったということでは決してない。ツックマイヤー研究においても、アメリカに協力したツックマイヤーの活動は重要な点の一つであり、戦後ドイツの状況を記した調査報告書や遺稿から『機密報告書』の原稿が発見されたことを機にツックマイヤー研究が進展を見せたことも事実である。

⁵⁶ Vgl. Weingran, “Des Teufels General” in der Diskussion, a. a. O., S. 21.

⁵⁷ Bermann Fischer, Briefwechsel mit Autoren, a. a. O., S. 363–364.

⁵⁸ Vgl. Weingran, “Des Teufels General” in der Diskussion, a. a. O., S. 23–72.

⁵⁹ Vgl. Der Spiegel, Nr. 37 (7. September 1955), S.40. [Microfilm ed.] Research Publications, 1947. 1947/1948年シーズンは844回、1948/1949年は2069回、1949/1950年は325回上演された。

また、ツックマイヤーが戯曲作家であったことも重視すべきである。戯曲作家は、演出、俳優、衣装など舞台上の全てを考えながら執筆しているのであるから、作品を書き上げただけでは意味がない。小説や詩とは違い、上演することによって作品が完成したと言える。戯曲は、文体だけの表現を越えた芸術なのである。亡命先の政府に協力したことや友人を頼って書簡を往復させたツックマイヤーの姿は、作品を完成させるために必死に上演の可能性を追求した戯曲作家の証であると言えるのではなかろうか。